

2117

古今著聞集

一



古今著聞集序

夫著聞集者，宇縣亞相，巧語之遺類，江家都督清談之餘波也。余稟芳橘之種，胤顧瓊枝之標，質而琵琶者，賢師之所傳也。儻辨六律六呂之調，圖畫者愚性之所好也。自養一日一取之心，於戲春鶯之囀，花下秋鴈之叫，月前暗感幽曲之易和，風流之隨地勢，品物之叶天為，悉憶敘筆之可寫，繇茲或伴伶客，潛樂治世之雅音，或託畫工，略呈振古之勝槩，蓋居多暇景，以降閑

古今著

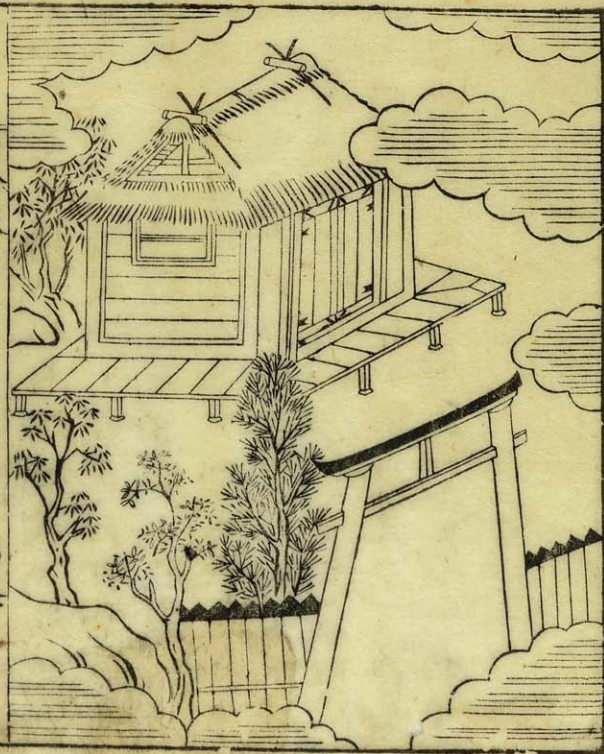
一

度，祖年之故，據勸此兩端，搜索其度，更註緝為三十篇，編次二十卷，名曰古今著聞集，頗雖為任簡聊，又兼實錄，不敢窺漢家經史之中，有世風人俗之製矣。只今知日域古今之際，有街談巷說之談，焉猶愧淺見寡聞之疎，越偏博識宏達之盧胡勞，不出螭廬，謬比鳴寶于時，建長六年，應鐘中旬，散木士橘南表，愁謀小童，猥叙木較而已。



古今卷一ノ

〇又



古今著聞集惣目錄

卷一 神祇 才一

卷二 歌教 才二

卷三 政道 才三

同 公事 才四

卷四 文学 才五

卷五 和奇 才六

卷六 管絃舞 才七

卷七 雜書 才八

同 術道 才九

古今卷一

卷八 孝仍忠堂 才十

同 好色 才十一

卷九 武勇 才十二

同 弓矢 才十三

卷十 了齋 才十四

同 お撲活力 才十五

卷十一 畫湯 才十六

同 蹴鞠 才十七

卷十二 博奕 才十八

同 偷盜 才十九

卷十三 祝言

才二十

同 哀傷

才十五

卷十四 抑說

才十五

卷十五 宿執

才十五

同 圖序

才十五

卷十六 真言利口

才十五

卷十七 莊異

才十五

同 變化

才十五

卷十八 飲食

才十五

卷十九 草木

才十五

古今卷一

卷二十 魚虫禽獸 才二十

目錄終

古今著聞集卷之一

神祇考一

天地いまこころのれど渾沌雞牝子のどろその  
と免海の海がひきて天とありあおまるといふ  
そあ海りと地とを海と記す天地のちひひ  
川のりのありかゝら葦牙れどとまれとら化  
て神とある國帯と考あまなりそれよりこの  
く天神七代地神八代より彦波瀲武鸕鷀草  
甕不合尊れ御子神武天皇よりそ人代とあり  
よき海とのゆと記成子れど九月ふそと久く

古今卷一

〇四

りあくの神祇まつききり第十代崇神天皇  
六年は天照大神を笠懸邑小まの山に降臨す  
小天社必社とよひ笠懸諸社の神戸とさる  
記そのしら世にさるり民ゆとり第十一代崇  
神天皇二十六年三月ふあまそそ御神れ  
るよまのぐひく伊豫此必いとれ川うまといひ  
て神二のひあみて倭作命と命あまきそ海つと  
きりたうそまかてうと神必とと大小此神祇  
記をんそく権化のた威と意あ御初つとら  
のなりいとある神御皇后れ三韓とあゆま

かゝる天邪神祇あつてくわつたれ多ひあるとや  
これよりして下をなぐも廿二社せんん城  
さゝきとりの門くま百五十四代のせんん城を  
半信天子よりくま先とあせんふの信を  
そのあつてくまわぶくといふ事ゆゑらびつ天  
日うれ神字あんまく元年六月四日うれや  
神くせんよむまううれやふま界小化陸  
て方便とあつて存生城とらびく名とつた  
おごとうがまといふなりや花のくまを  
わんれはあうとくくせんん城

古今卷二

内侍あひびくハ源安よとあつたれあつて  
らまもはと花のつううかれいのととあつて  
そのあつたれはくま温明安ふの信を  
は事いづ重れ神のくまわつたはかの安信  
源安よりまうり安信はくま内侍あつて  
あつたつらあつた板安とくまわきつ  
うりまもそ天徳内裏焼亡は神統の信  
まびくまひくまんの板安よとあつて  
うりまもそあつたあつたあつたあつた  
てまひつたあつたあつたあつたあつた

ろあけうけのふくせらききれどとれくらまびり  
 て山神やまのかみよのせほりりきりつて云く侍りされどび  
 事一ことおほく船ふねを日ひに記しるよ云天徳てんとく元年九月  
 大日おおひ申まをた別わかま光みつ船ふね下くだ来きよ火ひ氣き願ねが煩わづ惱なうを  
 温ぬる明あきぬ末すえ之の瓦わよ有あ鏡かがみ面めんを經よ八やち寸すん臥ふ能のう有あ一  
 般はん因いん親しん甚じん以もつ分ぶん明めい露ろ出し備び破は瓦わ上うへ見み之の者もの皆みな不ふ覺かく  
 我われ出し紀き勿なれどと小せう野の家や飯いひの事ことみえ尺せきおほく  
 かりたると寛かん弘こうれどうのうちんををほりきりきれ  
 ぞもはじもくけをほりきりきりを耐しのの公に親故  
 仍なほ成なりあり衣筆ひつに宣命のういのみ出附つけくし海うみせり  
 古今ここん卷まき二  
 〇六

長なが久ひさ熾し七しちあを屋やけそんせ三さん務む孫そんよき孫そんれり  
 そのわけをあひくる所ところととりてううひつひつ小こ入いりあり  
 ていまたりやれそのせのせりぬ神かみ流ながはは海うみ  
 よてみえり神かみ威いのりともぬらかりりあふささ  
 びれども世のせりゆめと志し者ものもあらまひあり  
 ゆをあまさそ今いまけまいる船ふねんの句くじととと  
 延長えんじやう八年六月はつねん廿に九く日にち癸みづ寅とら案あん法ぽう師し初はつ成なりりて備  
 添そへぬよ候うよて念ねん併びりゆりきりふ教きやうやりくけく東  
 のひまりに大からん人れあむじとしはえきり身み業ごうとと  
 せ成りさわげとんきれたわゆとくし海うみをとりて



人見（み）たゞ（き）は（た）ま（た）又（た）小人のあま（た）く（た）海客（た）を（た）唐（た）く（た）ら（た）く  
りりて女客（た）ゆく（た）あ（た）め（た）ら（た）りて（た）作（た）ぞ（た）と（た）さ（た）ひ（た）を（た）ね（た）た（た）勅  
と（た）りて（た）ひ（た）ら（た）と（た）と（た）あ（た）人の（た）ひ（た）き（た）ら（た）ハ（た）先（た）度（た）り（た）ん（た）ら  
大般若の（た）法（た）流（た）つ（た）る（た）海（た）国（た）と（た）小（た）疎（た）り（た）き（た）ら（た）ゆ（た）步  
事（た）り（た）つ（た）り（た）の（た）邪（た）氣（た）之（た）の（た）短（た）小（た）ら（た）りて（た）足（た）せ（た）け（た）ん（た）じ  
と（た）て（た）ら（た）ず（た）き（た）就（た）ね（た）後（た）れ（た）び（た）の（た）金（た）剛（た）般若（た）の（た）法（た）流（た）  
菩提（た）の（た）内（た）く（た）疎（た）り（た）き（た）け（た）ら（た）り（た）と（た）養（た）は（た）り（た）て（た）大（た）般若（た）  
れ（た）法（た）流（た）と（た）は（た）あ（た）ま（た）ぬ（た）あ（た）ま（た）箱（た）落（た）の（た）社（た）り（た）ぞ（た）  
う（た）せ（た）ま（た）ぬ（た）身（た）累（た）い（た）ら（た）け（た）養（た）は（た）り（た）ゆ（た）ら（た）り（た）三（た）升（た）され（た）  
法（た）字（た）新（た）理（た）の（た）社（た）八（た）梁（た）瑠（た）璃（た）珠（た）五（た）粒（た）之（た）智（た）理（た）大師（た）流（た）  
て一（た）首（た）の（た）和（た）梵（た）と（た）深（た）宣（た）一（た）語（た）き（た）佛（た）

あ（た）ま（た）禪（た）に（た）法（た）海（た）を（た）り（た）は（た）と（た）ら（た）ひ（た）を（た）

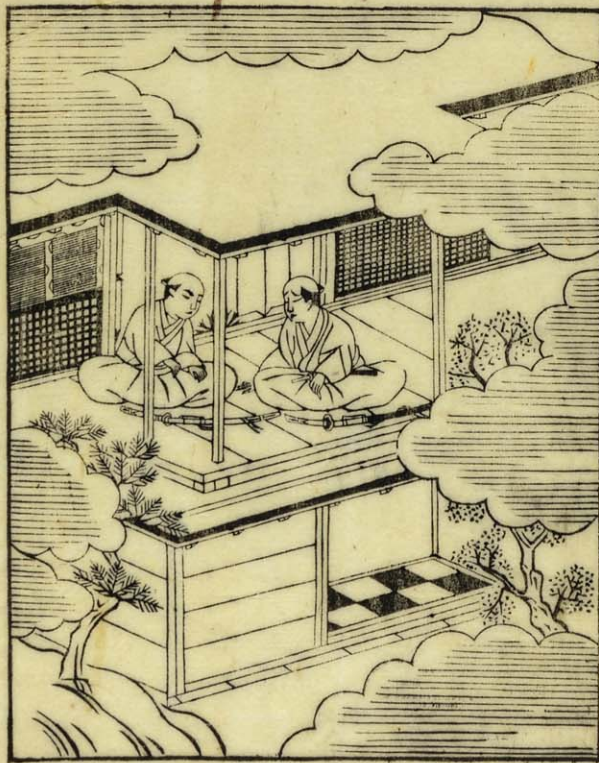
わ（た）り（た）き（た）然（た）りの（た）代（た）あ（た）ま（た）き（た）あり（た）て（た）

慈（た）覺（た）大師（た）の（た）法（た）流（た）う（た）と（た）ま（た）ひ（た）き（た）ら（た）対（た）白（た）髮（た）れ（た）老（た）慈（た）ね（た）  
き（た）は（た）さ（た）り（た）く（た）山（た）は（た）ら（た）ら（た）上（た）り（た）き（た）佛（た）が（た）わ（た）れ（た）ら（た）内（た）裏（た）  
守（た）護（た）と（た）い（た）ひ（た）せ（た）法（た）流（た）の（た）身（た）護（た）ら（た）い（た）年（た）を（た）ま（た）ぬ（た）く（た）成（た）  
ら（た）ら（た）う（た）い（た）ぞ（た）と（た）宣（た）ひ（た）あり（た）き（た）が（た）は（た）ら（た）ら（た）ひ（た）ぞ（た）と（た）

予されしは後其の社とを分り給ふ所也  
 法威もめてせありきりし位其の所たり  
 一石の石貴座王大菩薩  
 兜率天内之貴座五菩薩之為法護  
 為の善に造松林下久遠風霜耐有  
 有佛地願發達云家建立一伽藍  
 小うして社云と云連立せしむる  
 基中傳りし社衣通塔之玉津  
 之和秋の浦玉津傳の明社と云  
 背皮浦北風系と饒思食り云  
 古今卷一  
 〇八

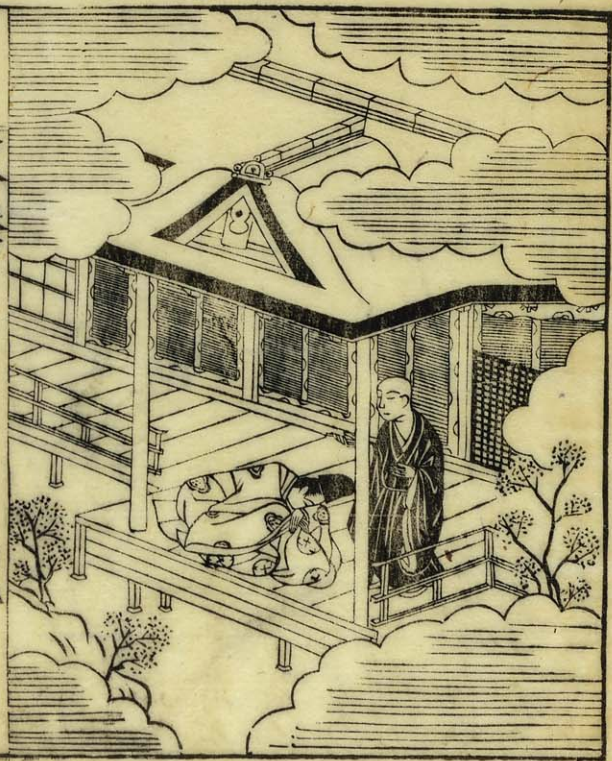
まのぢりぞぞ

小野宰相後天祚世此苗裔之  
 傳流りたるの居登ゆしと云り  
 仁年よた宰相大式小位  
 つきて安あると云ん其の  
 といふも塔築いす  
 ありき所よりく遠  
 りび思念をりし  
 宣いといく大式  
 亦西園大式



古今卷ノ

八



塔字經く大教家源依圓錄命為任暫傳地事  
とやと遂げ不岐命力之人を現世後生の大教皆  
成寸生く世に因果令變する家別志相のみ  
つらふれを記に都督のやと信いと遂て二身  
がけ且多宝塔一基とせしめ胎胎此天御と  
わ介法苑千那と納め存此これを目く此堂  
とりばく釋侶とゆえ不逆の法を免といふ  
示のに寧府れわひのころ此佛事辨ふ此儀式  
寺勢れわふのころ法身をて著く記かたかく三卷  
の著とる付く寶藏又細く今又傳り秩滿

古今卷一

の後那(為)めく書歷二年と系後又信り寛弘  
六年十二月十八日とせしめ後非とわくれ  
て兼洞と廟壇を傍よのころ萬壽三年二月  
僧正一位に加階よあつりあひきり  
一系院中の上總守御堂といふ人五千納れ法苑經  
傳編此れの中よりまきれれ身御門くきて  
僧を人といふ(と)ころころの法具といふく日たれ  
解乃手痛く二になく形りまきれれ神感と云とわ  
らに上總守よあまきり法苑此堂あれとくらんを  
りく子の経法始くきりそ夜れ愛小ま信持ま

来くまらた少く出二条れてゆくつらうて  
て感懐と成てかり思きり耐守かく佛は  
誰よりかり佛とてかききれど中條日れ二条乃  
守儀十禅師とてあてまをもひく前とせん縁した  
まひき縁

一 二条の山法成寺を川人れとせ

二世の佐の作と六なりきり

耐守のて下も船くまううて受て生記共のり  
てうとをれゆつとてりきれん

極楽の道れろるべし乃成てと

心甲の川の成るなりきり

細くてもひき縁が立ゆりて又縁をを縁を

物多れ人のうへをえん

ひあさそれきかりと縁を

念意と成つて中成終る六雨くまり縁ひきり

わりれよあうまにり

長慶二年は天夜座主れ縁ひきり

三升もれ咽学大僧とあうてふは園白後志

さりと執りしをあひたり山成びりてと縁起

て十月廿七日あ六百人下添してをける場とあり

まりて養所を移りたるに及びて三月廿七日山内僧堂自反  
 多戒もぞゆりたり内三年二月十七日山内僧堂自反  
 此門ありありとくせりなり千八百も来くわの死  
 のしんれをひひておそく侍を侍平れ此方同禁眞  
 小作しきくもせせり秋を程よまよき守次嘉徳  
 りの和得りたり可於程よ山内僧堂於明き僧  
 正と同宗れ此をえよきれ山内僧堂とめりあまび  
 たりにたりたりと急折してゆを小きりらやさてぬ  
 秀僧都座主より次なり程秀良秀秀僧於路  
 起の徳りんせしと勅勅衆りたり言程よ同七月

古今卷

大内より玉所堂のちぬ事なる酒の由り  
 尤ととりれれ井沖減たて日教活のせ行  
 重徳元は八月十日されり此徳宣元重僧  
 於とめされたりと後記とわく此減わりのける嚴寺  
 たり此事なり

同年中法大内臣依國宗主小形りたりなる紙  
 同之〇宣月二日若菜元此徳宣小宗主那史  
 ら於念はは何りたり遷宣れりよ於宣此事大  
 われれ悲れわきりたるに六月廿六日依あつあ  
 小形宣の由(流れ)きりりり此程よ七月十日若

孝文親王の内侍より豫宣のりおのるに配成るは  
たりと云ふなり同十六日おのりて内豫宣ありて  
信成が孫清依とめと作られたるは信成と云ふ  
りあるは信成は信成宣中と配成るなり  
御さきのむらと大さかたの御りありと云ふなり  
有道理よそむきりともく先へかへに云ふなり  
養父のむらと信成のむらと云ふは信成のむらと云ふ  
めと云ふは信成と云ふなりぬは信成のむらと云ふ  
りて先へよつたされたりと云ふなり養父は信成と云ふ  
なり

古今巻一

延久二年八月三日うづまのついでに信成のむらと云ふは信成のむらと云ふ  
小幡雅の後と云ふは三年よりおのりて明王の國  
と云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふ  
なりこれよりおのりて信成と云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふ  
なりこのむらと云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふ  
なり

後三条院の御りて信成のむらと云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふは信成のむらと云ふ  
なり

く下されくみつと物成すのうさきと物成は洋鉄  
かりするに鉄の質よりれ本一形よりけり主と  
あつたれとるせ給くたさたられた本り也  
はあつくうえはよりそ後毎も入梅さるり也

大宇寮唐僧六省のわのあつたもさあさる  
わう人れ及よ尾元此室りく分ちてのちけり  
あのおふさきりし後のを律文集條則礼經合條  
とてりびとわんきりさうり後ふはげばなりよ  
き師くおん智長は肉體のせじとそあられ  
とを給くう事わりたり福ん法よ吾月大明律よ

古今巻二

と福んせき勢よりなりは大明律抄のつせ  
より今一廿六のりさなりやあさる作さ  
なり新と一前よりせ給くを心とやぶる  
はく大明律撰序の後ぞ小政而事二ある心成  
行よたりして文又はあつしとて天下はつ  
ごとく物を信ふたりそくせんのだるれはめく  
〇元永元年は月九日顯通大僧長守御をよん  
督あくとに物役ありくとられ海よいの者  
わく家筆の宣令下はたりかきそはさるり  
とあつたりく求められはは次なりふひて



作りきん父の八幡をて附ねた長あくおのき屋があ  
事代中まであつてさうさりのやうさぞ宜いとき  
保安三年正月廿三日小大畑をよらぬれきれども  
日月よひひ城がひく文れ程よよまにあらへ自ぬ  
うせくせにかりおとの事よふくはざりや中流を  
大卜宰相中将えゆきや 七歳とつたれきや

基澄下園防と云るは保安三年十月  
かろきりのは事よふぬれれ程よくおのすん  
宰相れりるえ種きりりのおそそ神回成り  
んときれを實前より蛇之百少ゆりる内おつた

古今卷一

二上

二川にきりて入ぬき後れりんききれ  
馬ねりてひまりと神回の輪れ種とくひぬさそ  
根ぬの上は晴きりりるんてんてん神りりりり  
わりのゆりりりりりりりりりりりりりりりり  
比々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
程よ鴨川のあゆみとゆきさうりりりりりりりり  
原りりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
と海よりのあまきりりりりりりりりりりりりり  
つきて孫より子よりりりりりりりりりりりりり  
が美濃あそむひく宝りぬりりりりりりりりりり

氏人成じ久しきりしうあれを尊の上よ忙然とく  
わたりきる成せしうがごとくおちくまのりおきりも後  
ほろへひしうれはるる康季く神を母よ叶ひて承ゆ八  
あやうしとまがうた妻の耐小進康康康康康康康康  
果代えは成よきりしお季範季範季範季範季範季範  
重康康もい康季が子孫よてこれけ職をさうめ  
しう他あれよあわううた事し

餘あみ年八月朔日行ぬれ季帯るをり大元は令更  
作れぬ事めせし執るるに大内紀儒承六りありあり  
系しうをせん宣命と承るる人ありをれし上

古今卷一

とまのひく宣命と承るるくお西紀祖承也きる  
くそと号きく執るるに宣命く多の神威さしは  
自滲せしを承るるして三月五日に承りてくゆり  
しうありやわん

裏書云 改宣命候

天皇 詔有止 掛長 其大神の 廣前 忍 忍  
申給此 申候 今年之春 亦依之比 雨澤 須旬 年  
穀有年 信支 由 令新 申給而 神明 為 益  
依 天 狩 獵 豐 登 期 給 頃 月 早 雲 久 燧 膏 雨  
不 滌 百 穀 附 祐 礼 万 民 苦 業 大 神 日 域

岳跡タテノトコロ多タカ木キ遂ス窟ク兩リウ師シ傳デン各ナニ集ツク靈レイ詞ジ和ワ然シカ則スレバ名ナ山ヤマ大ダイ  
 澤タク和ワ興キョウ雲ウン之ノ致シ雨アメ赤セキ土ツチ得トク海カイ澤タク之ノ應オウ濟キ壽ス誇カウ  
 収シユ獲カク之ノ功コウ世セ世セ大ダイ神シン乃ノ无ム限ゲン其キ助シュ亦ヤク在ゼン之ノ所ショ  
 念ネン行コウ天テン故コト是シ以ヨリ吉キチ日ジツ良レイ辰チン平ヘイ擇タク定テイ天テン官カン位イ  
 姓セイ名ナ平ヘイ卷ケン使シ天テン禮レイ代ダイ乃ノ大ダイ幣ヘイ乎フ令メイ捧ホウ持チ黑クワク毛モウ  
 御ミ馬マ一イツ疋フツ季キ副フ天テン奉ホウ出シュツ賜ミ布フ掛ケ畏カ大ダイ神シン此ココ  
 狀シヤウ乎フ平ヘイ久キウ聞ケン食シキ天テン炎エン氣キ忽コト散サン天テン嘉カ滯チ旁ホウ  
 降コウ天テン田テン園エン滋シ茂モウ天テン人ジン民ミン豐ヘイ稔セン平ヘイ祭サイ良レイ天テン皇クワン朝チウ廷テイ  
 中チュウ寶ホウ位イ無ム動ドウ久キウ常ジョウ石シキ堅ケン石シキ夜ヤ守シュ日ジツ守シュ尔ニ護ゴ  
 幸コウ給キツ此ココ食シキ国クニ乃ノ天テン下カ平ヘイ無ム為シ無ム是シ尔ニ守シュ恤シツ給キツ此ココ  
 古今卷一  
 〇十六

愚コ羨セン忍ニン毛モウ申シン浴ヤク波ハ取ク

保延五年五月一日

作者内記文屋相水

澄テイ氣キ江カウ下カ保延八年は無福の別あり歎ナゲレたり和ワ心シンと  
 衣イ後ゴ和ワ心シンひヒたりをねむ澄テイ氣キのりリ後ゴりリ歎ナゲレたり和ワ心シンと教キョウ百ヒャク騎キの軍イクン  
 志シ込コ申シンして十月九月のあより無福のようありと云イハふ  
 多タりリ澄テイ氣キの方カタれレ去クる中ナカ人ヒトもモれレんんののるる食シキ我ガ  
 乃ノくク澄テイ氣キがガのの軍イクン去クる多タくク令メイとトうウかカひヒりリかカよヨくク人ヒトを  
 生ナマれレ小コきキ行コウはハりリ澄テイ氣キ衣イ後ゴのの頃キョウとト切キくク心シンとト燒ヤクじジ  
 中チュウあアづヅはハ下カ知チちチりリ々々れレ也ヤ澄テイ氣キがガののけケはハ放ホウ火カれレ  
 かカとトわワるル物モノをヲりリちチれレ中チュウのの小コ火カ二ニ三サン度ド燒ヤクたりリをヲれレ

ぬかりくさえよなり大りと食我れりやとた多かりなり  
ま目よ神光を心か食我とて足ばかりなりわの人  
義もて神光の志麻れくらけりてをり又神皇  
附書がまよひらぐりてまると志麻れありなり附書わ  
やして四それども日大の神の内食我由傷よ若人の飯の  
もみせもすまてて善なる時遊野く行くは是が今よ  
きり大の神れはもうひそそ若我食利よ志麻れま  
まあり事て若入道夜と六秋のありや中若は若角也れあ  
世家の由事あやとぞゆかゆ

古今卷二

の空より多ひなるはをれなり人夫あわくは  
よそくゆきるぶくまきくありなりをれどく遊すれ  
きゆけはゆる人ま一人まよりふちげさやゆかひんさ若  
の由徳よりりてさひはは遊野の由山味あんとは  
つる小の由されはくせしてゆらうんすう遊さゆかり  
まげくゆけささせま下もゆの人はひはれなりさ  
命りこれまのゆめあふせんといひれなり  
唯由理は食むくりて甲あさまひんもまづ久  
は長とゆんはよまねであれそをせり彼も  
くひりく若くもて人をもまてゆども若人ありれ

ねと目とりとらなれどありきほくあつてくへんまわ  
 えれどもりえん作とあきまひくわうのいそく統  
 後れれおふおあしんまの事まのさしあめりはる  
 ねあしんおあしんをらわけても遠とわあしんり  
 わりかえりえとわあしんれとあまもあしんるあふ  
 ねあしんりさあしんあひくわあしんりああしんり  
 皆とさあしんりありさあしんりああしんりああしんり  
 かあしんりああしんりああしんりああしんりああしんり  
 さあしんりああしんりああしんりああしんりああしんり  
 まあしんりああしんりああしんりああしんりああしんり

古今卷

ねと目とりとらなれどありきほくあつてくへんまわ  
 えれどもりえん作とあきまひくわうのいそく統  
 後れれおふおあしんまの事まのさしあめりはる  
 ねあしんおあしんをらわけても遠とわあしんり  
 わりかえりえとわあしんれとあまもあしんるあふ  
 ねあしんりさあしんあひくわあしんりああしんり  
 皆とさあしんりありさあしんりああしんりああしんり  
 かあしんりああしんりああしんりああしんりああしんり  
 さあしんりああしんりああしんりああしんりああしんり  
 まあしんりああしんりああしんりああしんりああしんり

ねがももうみん狂夢をば永元元年八月十六日納を  
 と辞して正二位成中りさゆんざらべんを成る  
 加階の例がらじきれ実伴にええ元元の人か  
 思はれらるとぞとておのれ後を成世の人か  
 うえりぞりあひびくうぬ成成りてひええに  
 海く舟のめを流る空をほし行路をゆく  
 花とや後よんをばよ流るまてさよのた納を  
 多ひなり成るいまじくびくとあひく成る  
 世へのまは伏し成るにさも成れじまへて成れ  
 みどりお相の業をと極くまうえんや程まへに

古今入卷

思はげくまをれと作く世をれを信傳の傳とのひ  
 親表の志をりて向さるれをりて生活あり  
 秀句も多くやえを成り

羅官末忘九ま目 五恨將途大交志

かまふれしハくせよまわりあそれる

後一くくくはのくわりあり

これを成て世の人いどわらわら成るなりを  
 かくて年月とや程は流る元年三月六日物音地  
 のおとく内大臣よりかりり成るに成るなり  
 是後ひく小松のわらわら成るに成るなり

内大臣小のちりききせりりり小大臣をよかりり  
六月又自國を長程ありて大和を降しりされされせり  
まひし願ふやとくこのもゆるりされたりとくさりりて  
月日れをされむいさし如就とんりりく徳小治  
なき世の仲より教とまらゆるねよ五月廿七日つふ  
たちねよあられよをりりり文の由縁宣しとい合  
きいけく徳れ宿教も教くもそそ我もひまひも  
同三年三月晦日いほく徳よあるとそ出れり  
大臣云実忠に中納言実家江平ごとくあはれき  
とぞ五月仲海門に府し事り治り三系に大臣

古今卷一

今道その時大臣をかり大臣れを政大臣は仲ねよ  
てゆりきりもゆりきり仲りされたりいされりや  
仲ねりの徳の宗子あはくを宗子此曲やちう徳意が  
前白うなるりり仁安元年六月にむるれさりり  
女の養子よ天下の政不信なるりりりり家の大御  
月平必成控く徳あまうを治るはは是てきり同  
七月上旬祝久徳が養子と同新よ入てかきふりり  
恭親時信とてり占りせむりり実養れりり後や  
依承に年九月に余れ院いつり海よ実養ありり  
西朝又といりり事ありて下下 養子ありりり

帝代のりあやほに新とくに因知なりきれど故曰し  
是人宗内少輔就經表紙年々よりき居ておん

舞鶴此傳のり少種細をよむ六のりよりき居る  
少子まをよむお居をれいよまわくりきれどま日社  
小ありとくやまればまをりしおりきれき居よひ  
しあひまをて八幡の傍で七日中りして形念をけりよ  
お居よゆまげおりお入れありまよりき居よ大言獲  
はか面を中へお入とれがよと傳やおをりいよと居  
きれどさる事ゆしくあつてやま居たり又お入居り  
件の傳年々おをれとわりのよせあつたれ今年度必

古今卷一

お雛まをさのり樂よまをりけんいりおをひ  
とつひんくおゆりよまほくゆくよまおりけ  
そこのりお居おとけお人の御ふくまをてせ居ぞ  
やんよあをれどま目たの林おゆりよりなりと居  
てよりお居まあおまを今まけけらまをてりけ  
おまのさくおりまのりまをてまをりておちおゆり  
地まをりてまのほまお居てけそつあおはまをさげよ  
まのりま山のお氣の偏病の種まをり目たれまをりけ  
まをりまをりよすまをりまをりまをり

作しおゆりやんあまのりまをりまをりまをりまをり



愚かそりたらあまは左の山戸残して答うせよゆ  
 敵よけさゆききりて武内とめきれぬ豊く志忠  
 池ていをはなれたいまの自髪は信取うまは松葉六  
 合のなかばあふ畏くまひひはひけ白く泳  
 て山船さけとびきりたり又山道は内よりええ  
 れ中へ幸え世中をされせんとし志忠く時政かき  
 かりく世道下と作されせれど唯纏して  
 おじまはとよおに後さあまなり母事とよよまは  
 義附部下は山後身あやその子泰附までもま  
 人よあきざりきり

古今卷一

世の海は麻んゆとぬくかりふきり

ふれりくのよりのこと

は高の波は下れ新のまのあもるまにほはとくを捨れ

新橋津高橋改新 王くくりに望みううまの

更き海は空家のあまうつれくあひわかりて申久次

牛く西戸窟のあまの何とがは新吉れり一垂し

社司よとくひは心宝殿よこあきかり新たりまはせ

て後雪吹れあまぐれりてわたの林のあまのひは海に

せりゆきまんとてや文とあつあつと松葉あふけせて

社司の人あま社のあまのくに成ぬるべき一昨日



みたりよ我を悔る君ありやと直めおとんくまあふ  
きりて後さんげしてつねとくたりて公使とつとめお忍  
程よ罪をわらふ事あり

馳使に先渡を先送れぬが之の如き平日の若くは若くは  
の花を八十ふありて五歳中を補せたりを信せられ  
養王寺ふらふ事ありや

山川の市よりふたりともをみたり

保まも厚くぬれや好むらん

是れ仲よ由成りやと語りや

あきりあひあがりてむす山川の

古今卷一

〇五七

なつれもやぬめおおとひ

好久は平正月十六日大和紀良業志成ありや

十六日れあつては内書無昌が着よ夢成れは

ゆく除目とくあつてやうとてえを信よ小折紙大和

紀ありつゝのりつゝとてまきつゝとてんく思ふまきり

つとまじは信りあつたつげたりされや多く信つゝ

まきつゝとてまきつゝとてのりくまきつゝとてその花

大和紀よぬおきりてなり仲隆助成時と昨年

中へ競合しき信り人勝方大監督といふに備官と

方よりれだらふ事ぬれいへてとてあつたりを代け

このいふをいれたりし人にもなりきりしふ系社を  
ありて名途をきりしは同知を符のいなり

前大和守を原守法に改めたりし海つりくを大尉と  
のなりしを考へありしを何多尉は次作れんとす

此社此産を遠をより下より龍寺の次切す社  
推奉ちけきバてうぶさやもゆりきりしむくの

らとくふとれよきりき徳が社の社の昨まへ徳を  
のよ中対てらりしれ社社徳せき徳きり社小海と

みくるまふいかりしり社徳きりりめ入るわひく  
きとまひくふの西文此やきりりき徳が社りし社文は任

古今巻一

きとむくくば社ひきりきとて甘れが社徳わはれ

し徳のありしやきりし社徳は社徳社よりの社  
あてきりし社徳わりきりきバば社社わはれ

あひあきとて法れなのがらとくふあき徳にりきり  
社文わりぬ社社をきりし社徳をきりし社徳をきりし社徳

と然りし社徳わりきりし社徳をきりし社徳をきりし社徳  
きりし社徳をきりし社徳をきりし社徳をきりし社徳

れらとくふとてきりし社徳をきりし社徳をきりし社徳  
とまはれ社徳をきりし社徳をきりし社徳をきりし社徳

わり社下れりし社徳をきりし社徳をきりし社徳をきりし社徳

ふ若き人ぬく船に在るは美しき海づきめを耐  
編成わたりて氏人秘傳といふのありを解とせ  
舟一とていふふせりるききとくしよのふかきを耐  
秘傳といふ氏人やわらやふきれを秘傳秘傳といふ男  
ふのまごといふものひそくせりるわびくしりて  
さゆりざりていふ後秘傳秘傳といふしりるもあ途  
まげくがり及勢ひひる君臣のあえむじひと  
秘傳といふひたりせえくせんていふ

二系宰相秘傳といふ秘傳の秘傳といふわづり  
ふらへそのうと昔の中わは通くききとあ  
い多くあつて秘傳といふ秘傳といふ花山院の秘傳といふ  
秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ  
秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ

世けよ秘傳といふ秘傳といふ  
秘傳といふ秘傳といふ秘傳といふ

け美しき人ぬく船に在るは美しき海づきめを耐  
編成わたりて氏人秘傳といふのありを解とせ  
舟一とていふふせりるききとくしよのふかきを耐  
秘傳といふ氏人やわらやふきれを秘傳秘傳といふ男  
ふのまごといふものひそくせりるわびくしりて  
さゆりざりていふ後秘傳秘傳といふしりるもあ途  
まげくがり及勢ひひる君臣のあえむじひと  
秘傳といふひたりせえくせんていふ

いひく偽作のをもさうまゝあんなきぬ牙は成あつて  
二佐宰相までのがりて侍り是やうあり大御衆の  
初まに仁安二年に月廿一日を國宗あて侍りを心よ  
侍り侍り位階御下民人むぐり侍りせしめて仁皇御孫を  
於こゝろひまふは御あつて此火障子ふりえ付くその御  
庫けふたり大徳也門室町ありそのごありい民々に光  
忠卿の御く侍りあつて侍りせしめて火を門に侍りあり  
おそ御心をこゝろあや

古今著聞集卷之二終